

私の短歌

五島美代子





私の短歌

短歌の創り方と味わい方

五島美代子

柴田書店

私の短歌

¥ 260 © 1957

昭和32年9月20日 印刷

昭和32年9月25日 発行

著 者 五 島 美 代 子

東京都文京区本郷3の2

発 行 者 柴 田 良 太

東京都千代田区飯田町1の23

印 刷 者 中 内 佐 光

発行所 東京都文京区 株式 柴 田 書 店
本郷3の2 会社

電話 小石川 (92) 7797

振替 口座 東京 4515

落丁本・乱丁本はお取替致します

晩印刷・協栄製本

序

短歌は私ども日本人にとっては郷愁のようなものであるらしい。

生きがたい時代、忙しい生活、枯渴した人と人とのふれあいの中に、心のふるさとして短歌の創作を、ひとりひとりがふところにして居られたら――、少なくとも私自身はそれによってすぐわれて来た。

子供のころ何とはないあこがれから百人一首のひびきに魅せられ、中等学校時代明治天皇御製に育くまれ、十七歳の秋やと佐佐木信綱先生の門に入って本格的な稽古をはじめてから四十年あまりになる。

私にとっては生まれるものと信じている歌の創作過程をあとづけることなど、大変むずかしい気がするし、まして人にすすめたり導いたりすることには全く自信がないので、やむにやまれず歩いて来た自分の道を、ありのままに語るといふことの方を主にした。

「はじめて歌るつくろうとする人のために」の一項だけは、都主

催の講習会で、家庭婦人を対象にメモもなしに話したことを、柴田書店でテープ・コーダーに収められた、まことにはずかしく至らないままのものである。

自歌自釈は、もう十年もして本当の老人になるまでは、決してしないつもりであったのに、ついすめられるまま書いてしまい、これも汗顔の至りである。

短歌を愛する方、短歌に関心をもたれる方は、たしかにある——と、見えない同志に呼びかけるような気持で、私はこの舌たらずのままの一書を世におくる。時の流れ歴史の流れにおされて、とりおとしてしまいそうな自分自身を、しっかりとめておく一つの鍵として、「私たちの短歌」を大事にそだてていただきたい。

一九五七年八月二十八日

五島美代子

目次

装幀・カット 山名文夫

一 はじめて歌をつくらうとするひとに

- 1 歌は生まれるもの、それをもとにして創るもの……………二
- 2 創り方の基本……………四
- 3 表現のよろこび——歌は誰にでもどんなに忙しくてもつくれる……………六
- 4 メモと鉛筆をいつも持って……………九
- 5 歌になる感動とは？……………一二
- 6 オドロキ——本当の「写生」へ……………一三
- 7 タメイキ——「表出」。抒情歌……………一〇
- 8 ココロイキ——正述心緒・述懐・時事詠・思想詠……………一三
- 9 短歌のリズムとその体得……………一六

二 作歌技法——短歌の創り方

- 1 狭き門……………三
- 2 電流を感じる歌……………三

3	破調(字余りと字足らず)について	三六
4	連作	四三
5	推敲ということ	四四
6	イメージということ	四八
7	歌が出来なくなったときには	五〇

三 私 の 短 歌

1	短歌の鬼——私はどうして歌を創るか——	五三
2	母の歌から(自歌自釈)	五三
3	春の歌(自歌自釈)	六六
4	夏十題(自歌自釈)	七三
5	秋から冬へ(自歌自釈)	七六
6	明日の短歌のために	八二

四 短 歌 史 の 流 れ

1	日本の歌	八四
2	女歌の系譜——ますらをぶりとたをやめぶり	九〇

五 明日の短歌のために

- 1 終戦後の恋愛歌……………二四
- 2 澄子・牧子・ひとみ……………二八
- 3 生活短歌ということ——新聞歌壇にあらわれた「生活」の内容……………一四〇
- 4 十代の歌……………一四八
- 5 魔法の小箱——若い女性の友へのことば……………一五三

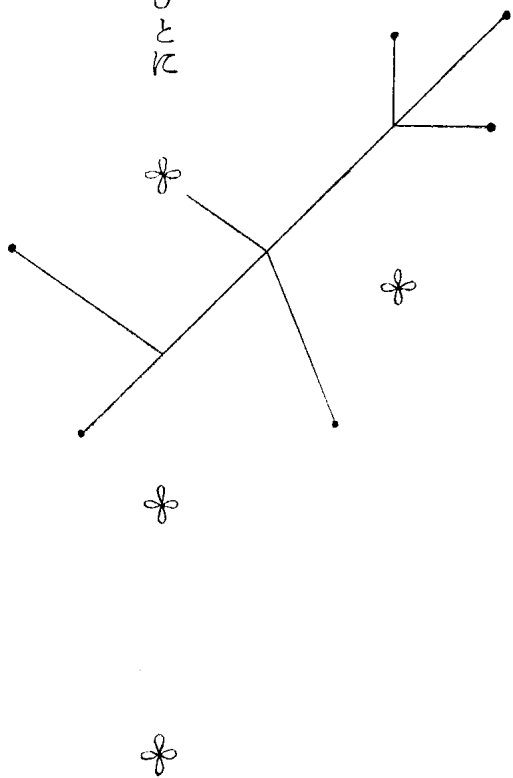
六 添削の実例

- 1 添削について……………一六〇
- 2 添削実例……………一六三

七 短歌の発表について

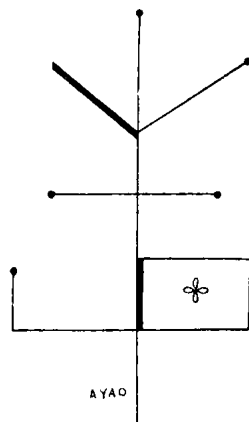
- 1 短歌作品の発表の意味……………一七四
- 2 原稿用紙の書き方……………一七八
- 3 色紙・短冊の書き方……………一七九
- 4 詠進のしかた……………一八四

はじめて歌をつくろうとするひとに



1 歌は生まれるもの、それをもとにして創るもの

歌を作ると申しますと、何かお菓子でも作って型にはめるように思われますが、歌は作るものではなく、生まれるものだと思います。尤も心の奥から生まれて来たものがそのまま短歌というわけにはまいりません。矢張り短歌として形成されてゆく道があります。私どもの心の中に生まれて来る本来の歌というものは、もと、形もなければ、声もないものですから、それに一定の形をあたえ、声をあたえて、ことばにし、心の奥からわき上がって来るリズムのままに、この世にとどめ、人の心につたえようといえますと、いきおいある程度の技巧が必要になってまいります。そこで私は短歌の創り方という字を使ったので、心の中から生まれて来た詩の「もと」を、短歌作品として創作し創造してゆく、その創り方を考えてまいりたいと存じます。歌というものが器用に一寸こねあげて作るものでしたら「作り方」でも良いのですが、短歌は芸術作品ですから創作する、新しく創り出すわけなのです。お茶やお花の稽古で初めのうちは大体先人ののこした型を習います。そしてそれに達してから新しい自分の創意を加えるのですが、短歌を創る場合には、初めから自分で創造しなければならな



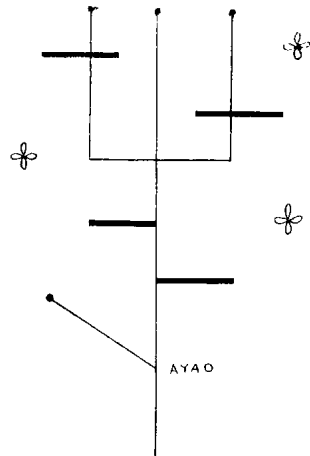
い。自分の中から生まれてくるものに短歌という型を与えて創り出さなければならぬ。この点が一寸難しいのです。

さて短歌というものに型があるとすれば、五・七・五・七・七の定型だけです。お菓子でしたら、ここに型があつてメリケン粉なり玉子なりを入れて作る——これもむずかしいでしょうが、——歌はなかなかそう簡単にはいきません。短歌における型は五・七・五・七・七の型一つきりしかありませんが——その中の内容は全部自分で創らなければならないのです。短歌というものは比較的入り易い道ですが、ほんとの芸術作品としての短歌は創作しなければならぬ、自分で生み創り出さなければならぬから、奥に入るほど難しい道といえます。

2 創り方の基本

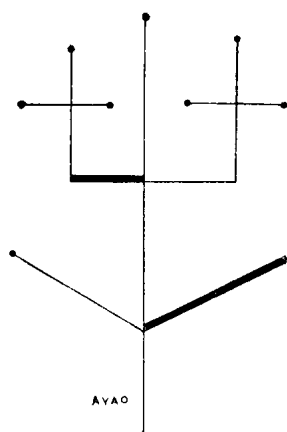
さて、どうして短歌を創るかといいますと、何も自分と離れた遠いものを持って来て、新しくしたり、フィクションを加えて新しい世界を作り出したりしようというのではなく、どこまでも自分の心の中にあるものに型を与えて創るのです。それが短歌の創り方の基本ではないかと思えます。自分の心の中にあるものに五・七・五・七・七という型を与えて、リズムにのってその感動を現わす、それが短歌の創り方です。この基本のところが一寸難しいのですが、自由に、誰に遠慮も気兼ねもない自分の短歌を自由奔放に創っていただきたいのです。

戦後婦人の地位とか暮しが自由になりましたが、それでもやはり婦人方は日常自分の思うままのことを言葉に現わし、行為に現わしている方は少ないのではないかと思います。男子の方でも生活上のさまざまな必要から、どうしてもやはり自分を殺して、周囲との調和を計らなければ、うまく行かない場合があると思います。いいことも言わないでいたり、あまり真正直にまっすぐ何でもその通り言っては摩擦があるというような時もある、始終言いたいだけのことを言っではいられないのが現状だと思えます。けれども短歌の創作の場合には、誰



にも全然気兼、遠慮なくほんとうの自分の心の奥のことをそのまま言っていたきたい。まず第一に裸になることです。裸になって、遠慮気兼なく何でも言う、それは我儘勝手という意味でなく、恰度宗教に帰依していられる方が、神仏の前でびったり一つになって何の虚飾もなく、ありのままを心の中で訴えるとか、お念仏を唱えるとか、懺悔するとか色々な方法がありますが、誰も世間の人は聞いていない誰にも知られないという安心のある場所で、自分の思う通りのことを、悪いことも心の中にあるみにくいことも何もかも洗いざらい口に出す場合もあると思います。すると心の中がすっときれいになって良い気持になるところがあると思います。短歌の創作の場合も第一に神様の前でお祈りをするような、神父様の前で懺悔をするような気持、或はそんなに固くなくても、たとえ話ですが、大変我儘な役者の世話をする奥役が始終役者に無理難題を言われても自分の役目柄それをじっと我慢している、そして時々「何々の馬鹿野郎」と我儘な役者の名を大声で怒鳴って自分の神経衰弱を治したとかいう話がありました。又「王様の耳は馬の耳だ」ということを誰にもいうまいと思って我慢していたら病気になった。医者のおすすめで森の木の下を掘って、大声で「王様の耳は馬の耳」と怒鳴ったら治ったという御伽噺がございます。心の中に溜っているものがありますと神経衰弱になります。思うことを言わないのは腹ふくまるわざだといいます。女のヒステリーと言われますのは、その大半は自己表現の道が塞がれている為でしょう。自分が自分勝手に表現したら人の為にならないとか、家庭に波風が立ってはいけないとかいうきれいな気持ちから言わないでいる場合が多いのですが、それがたまり溜ってこんどはどぶ泥のように心の中がなってしまい、ヒステリーになったり、人を憎んだりするようになってしまいます。そのために歌を創るのではないのですが、歌を詠んで自分を表現しますと、そんなこともなくなるのではないかと思います。

3 表現のよろこび——歌は誰にでもどんなに忙しくてもつくれる



まず第一に表現のよろこびということです。そのよろこびを短歌の創作ということによって覚えていただきたいと思ひます。それは自分が成長する道だと思ひます。苦しみを我慢するだけでなく、苦しさとか悲しさとかを歌に表現すると、恰度脱皮行為といひますが、蟬が殻を出るように又蚕が古い殻を破る度に新しい大きい皮を身に着けて成長してゆくように、人間も、苦しみや悲しみに真剣にぶつかって脱皮行為を重ねてゆけば成長するものです。そのために短歌を創るのではなくても、短歌によって自己成長を遂げる事が出来、従つて周囲をも幸福にし、自分が第一幸福になる事が出来ると思ひます。

一番最初に先ず裸になつて心の中にあるものを全部出して下さいと申しますのはそのためです。最初短歌におつかまりになる方は、裸になつたありのままを、神仏の前か森の中にもいるような心持で、お創りになつて下さい。そんなにして創つた歌を別段人に見せるとか、それによつて憎らしいと思う人に仇討ちをしてやるとかそんな氣持で詠んでは大めですが、表現のよろこび以外には目的なしに内にあるものを外へ表現する。その表現に

五・七・五・七・七の短歌の型を借りる、そんな心持ですと短歌に気軽にとびつけると思っています。お釈迦様でも「縁なき衆生は度し難し」と云って居られます。この短歌との機縁があって、短歌につかまることが出来、自分の一生の表現を短歌によってしようとする決意さえすれば、それはもう短歌にすっかりつかまったことになるのです。

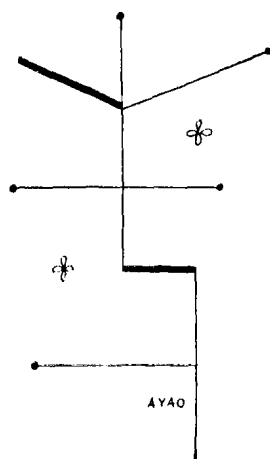
短歌を創ることをおすすめしますと皆様が一番先に言われることは「私は才能がない」とか「忙がしくて歌を創っている暇がない」とかいうことです。この二つがいつも短歌につかまる時の邪魔になるのです。

まず、短歌との機縁というものが第一に大切ですが、短歌を創ろうかしらと思って見る、或は人の作を読んでみるなどという関心があるということだけでもう短歌との機縁は出来たわけです。次の才能の問題ですが、私は才能が無いという方にいつも申上げるのは「貴方は才能が無いということがどうして自分でお判りですか」ということです。短歌なら短歌を一所懸命創って、そして努力をしてみて才能がないのか知らというのならわかりますが、まだ創っても見ないで、或はつくり初めてほんの少しの、一年か二年ぐらいしか努力しない方が自分に才能がないなどと決めるのは非常におおけない事だと思います。自分というものは天から自分に与えられたたった一つのもので、自分に才能がないという事を努力しない中にきめるのは、自分に対して大変つとめを怠っていることだと思います。仮にも短歌に機縁があって結びつかれた以上は、自分の中にある自分の才能を自分で掘り出して見る気持がなければいけないと思います。本当は、短歌は一生の道ですから、自分に才能があるかないかは死ぬまでかからなければ判らないし、思いもよらない才能が自分の中にかくれているかも知れないのです。それを掘りあてようとする努力をしないで、自分に才能がないと決めてしまふ事は非常にもったいないことだと思います。努力してみなければ才能があるかないかは決して判りません。天才と言われる人でもやはり非常な努力の後に自分の中の才能を掘り当てているのです。自分のなかの泉を一度掘り当てればそこからこんこんと

はじめて歌をつくらうとするひとに

湧き出る筈ですが、掘りあてるまでに一生苦労するかも知りません。とにかく努力してみなければ判らないもの
なので。

4 メモと鉛筆をいつも持つて



次に忙しいから出来ないと言われる方は、歌というものを何か思い違いして居られるのではないだろうか。現代の生活で忙しくないという方はないと思います。忙しいからこそ私達は生きているし、自分の生命と言うものが絶えず動いて、成長している所に自分というものがあるのです。忙しいから短歌が創れないということは絶対にないと思います。もつとも音楽とか絵とか、そういう道は忙しくてどうしても出来ないということがありませんが、短歌の場合は忙しいから出来ないという事は絶対ないと思います。私も娘の頃は机に向って歌を創る余裕もありましたが、家庭を持ち子供が出来てからは、毎日毎夜くたくたになつて床に入り、電気を消してからたった五分か十分位歌を考えるという事が三十年位続いたと思います。私のいささかな努力は夜、床についてから眠さや疲れとたたかつて、一日の時間にしたらほんの卅分以内の努力の積み重なりから、この道とはなれられなくなってしまうのです。今でも床にはいると何かしなくてはいられない気持で、暗くなれば何か紙の上に書きつけなければ気がすまないようにで枕の下に紙と鉛筆を入れてやすみます。誰にも顔を見られない暗闇の中で虚